

歴史から学ぶもの・310万人の命と戦争

310万人の国民の命を奪った太平洋戦争。戦勝国の身勝手の中での東京裁判。公明正大且つ公平な裁判が望まれたが、戦勝国としての連合国側の報復と思われる裁判であったことはまちがいない。

しかしながら、日本人が同じ日本人を310万人も死に追いやったことに対する検証は未だかつてなされていない。

A級 B 級等々の戦犯が決して妥当とも思えないが、一体誰が後世から見ても勝ち目のない戦争を起こしたのか？

歴史の反省から言っても日独伊三国同盟にならなかったならば、あの戦争に引きずり込まれることは無かったであろう。

当時ヨーロッパ大陸に於いてはドイツではヒットラーのナチスが台頭し、ポーランド占領に続きヨーロッパ全域に戦線は拡大、イギリス一国が孤立することになり、一日も早くアメリカの参戦が必要な状況にあった。

アメリカ国内にあっては大西洋横断飛行で有名なリンドバーグ（ドイツ系移民）がアメリカのヨーロッパへの参戦に猛反対し、国論は二分し反戦派が優勢な状況にあった。

イギリスの首相チャーチルからアメリカ大統領ルーズベルトに対しアメリカ参戦の強力な要請が続いた。

一方、ルーズベルトに於いてはアメリカを戦争に巻き込まないことを選挙公約にして異例の4期目の大統領選に当選した。この様なことからアメリカの戦争への参画には大義名分を必要としていた。

ここでドイツ・イタリアとの三国同盟を結んだ日本がアメリカの参戦への大義名分作りの標的（カモ）にされた。

ヨーロッパからは遠く離れた中国大陸に於いて、1931年の柳条湖事件を発端に満州事変が勃発、以来抗日運動も激しくなる中、日本の戦争遂行も上海事変から中国全土に及ぶ戦争へ拡大していくことになった。

一方、中国大陸では蒋介石が英米の支援を取り付け、抗日戦線は拡大、日本にとっては戦争終結が益々困難になって行った。

日本にとっては戦争終結の為には蒋介石への支援ルート（援蒋ルート）を遮断して、軍需物資等の中国への流入を断つことが焦眉の課題であった。この為には仏印インドシナ（今のベトナム）が援蒋ルートになっていたことから、仏印への進出が必要と言われ陸軍の北部仏印への進出となった。

話はやや遡るが、日本の陸軍は満州事変以来大陸進出を重要課題としていた。欧米

からは日本の軍拡による大陸進出への批判厳しく、遂に国際連盟を脱退するに至った。当時英米仏と対立関係にあったドイツのヒットラーのナチス、イタリアのムッソリーニのファシスト党と日本は自ずと近づくことになって行ったのではなかろうか。日本にとってドイツやイタリアは直接的な経済関係は深くはなかったが、日露戦争以来の仮想敵国である当時のソ連に対して、ドイツと結びつくことは、背後からの牽制になるとの判断があったと見られる。

一方、ドイツ側にとっても日本を抱き込むことによって、アメリカの戦力を或る程度分散し太平洋に縛り付けておく必要はあった。

加えて、日本にとっては中国大陸での泥沼の戦いが拡大する一方で、戦線は伸び切り深刻さを増すばかりであった。この様な状況下英米勢力の牽制を意図し、時の外務大臣 松岡洋右は日独伊の3国に加え、ソ連も含めた4国同盟まで構想した様であった。この為に日ソ中立不可侵条約を締結。しかしその直後、ヒットラードイツは独ソ不可侵条約を突然破棄し、ソ連に侵攻した。予想外の国際情勢の変化の中で、日本は不味のまま日独伊の3国同盟に留まらざるを得なくなった。

日本にとって安全どころか逆に英米を敵に回すことは必ずしも得策と言えないが、「バスに乗り遅れるな」の言葉に見られたように、日本陸軍のドイツ指向は益々強くなって行った。アメリカのルーズベルトは、3国同盟国の中で一番御し易い日本を旨く戦争に引きずり込むことによって、アメリカの参戦並びに、チャーチルの要請に応えることが出来るシナリオを描いていたと思われる。つまり、日本を苦しい立場に追い込む事によって、米英の何処かを日本に先制攻撃させ戦端を開くシナリオが期待され、結果として日本の真珠湾攻撃となったと思われる。

1941年12月8日(日本時間)未明日本海軍は真珠湾を空爆、太平洋戦争は始まった。これによって枢軸国の一角との交戦状態によってアメリカはヨーロッパ戦線への本格進出が可能となった。

真珠湾攻撃で多大な戦死者と艦船の損害を被った事実はアメリカ国民感情を一夜にして参戦派に変えた。日本の暗号解読含め手の内が全て読まれていた事実は戦後70年過ぎになって明白となった。

如何なる理由があったにせよ結果は日本の大敗北に終わった。そして疑問に残ることは、「何故に日本が勝てない戦争に踏み切ったのか？」

当時、日本の概ね10倍の経済力のアメリカ(鉄鋼、自動車は100倍以上)から、石油のほぼ全て鉄鋼生産に欠かせない屑鉄の全てを輸入していた日本にとって、これらを突然ストップされることは、日本国の死を意味することに繋がることであった。

日本の北部仏印進駐後、アメリカはもし南部仏印(今の南ベトナム)に進出した時は、

日本向けの石油輸出をストップすると既に警告を発していた。

こうした警告にも拘らず、多少甘く見た日本は陸軍による南部仏印への侵攻となった。アメリカは即刻日本への石油・屑鉄の輸出を完全ストップすることになった。

この措置は日本海軍を慌てさせた。海軍軍令部総長の長野修身は石油無くしては日本海軍の軍船は2年も経てば屑鉄同然になってしまうと警告。

開戦後すぐに石油を求めてオランダ領インドネシアを占領した後も、日本までの距離は遠く、石油を日本へ本格補給することが出来たのは太平洋戦争の初期の段階だけであった。

南方の石油資源を狙った作戦自体が無理な決断ではなかったのか？

結果は日本の敗戦で終わり日本民族を世界最貧国にまで落とし込めるまでの戦争を誰が考えたのであろうか？

恐らく答えは無い。悲しいかな終戦直後の東京裁判で戦争犯罪人として戦争遂行者の罪名で多くの人達がA級戦犯を筆頭に処刑された。

今更歴史が遡れる訳ではないが冷静に考えて、勝ち目のない戦争を戦国武将だったら絶対にやらなかったであろう。

大方の家臣の反対を押し切って出陣し、今川義元の首をとった「桶狭間の戦い」は余りにも有名であるが、真珠湾に端を発した太平洋戦争とは異なる。

今川義元が京都に上る進路上にある時、尾張の織田信長の家臣は籠城を唱えたが、信長は城を打って出る作戦にでた訳である。信長軍の7倍以上の軍勢（2万人）が攻め寄せることは殆ど負けを意味する訳で、籠城したとしても多勢に無勢の状況では所詮負けの可能性が高い。信長としては家臣は命乞いで助かる可能性があるが、信長は殆ど助かる見込みはない。寧ろ、隠密の知らせによれば今川方が桶狭間の細い間道を抜けてくるのは間違いないので大軍勢も一度に終結は出来ない。攻めるには桶狭間が戦略的に優れていると判断したのであろう。信長は多分幼いころから野山を駆け回っていたと言われており、地理・地勢に精通していたであろうことから、攻めに打って出る方が勝ち目があると判断したのであろう。決して博打的判断とは言えない妥当な行動であったと思われる。

他に、勝ち目のない戦として織田、武田の「長篠の戦い」における3千丁の鉄砲による武田騎馬軍の全滅があった。この武田騎馬軍の全滅の理由は一体何であったのか？

武田騎馬軍は武田信玄の死後勝頼が武将として勇猛であっても、信玄の家臣団とは反りが合わなかったのではなかったのか。恐らく織田信長を攻略するほどの知略に欠けていたのかも知れない。

信玄子飼いの家臣達にとって諏訪御前との間に生まれた勝頼は外様であり、織田軍団の組織を見習った勝頼やその近習とは十分な信頼関係になかったと言われている。

諏訪出身の武田勝頼の振舞いのままでは、何時かは武田は滅ぶと信玄家臣団は見ていたのかもしれない。

僅か300～400m位のぬかるんだ田んぼを隔てて両軍は対峙し、馬除けの柵と三段構えの鉄砲に向かって武田騎馬軍は何回も突撃突進して全滅していったらしい。

突撃によってひょっとしたら活路を見出せると思ったのか、華々しく討ち死にして家名を残そうとしたのか？

武田騎馬軍は最強であったが為に無理な戦法に最後までこだわったのか？歴史はこの戦いで信玄公に御恩の厚い家臣団が率先して壊滅していった。

不思議なことに、太平洋戦争に於ける大日本帝国陸海軍も自滅の道を進んだ。

昭和の時代に於いて、最初から捨て身戦法に近い考えで太平洋戦争に臨んだ人間はいない。日本陸軍の驕りの中で蒋介石への支援ルート遮断の目的で北部仏印、さらに石油を目指すと見透かされた南部仏印への進駐が、ルーズベルトのアメリカにヨーロッパへの参戦の為のヒントを与えてしまったのではなかろうか。

日本が中国で戦線拡大を続ける上で石油が必要なのは明白であった。既に国を挙げて日中戦争を遂行する為に、鍋・釜に至るまで供出を国民に迫った背景には、戦力となる艦船はおろか大砲・鉄砲・弾丸・弾薬に至るまで資源は枯渇していた。

又、援将ルート遮断の名目で北部仏印から南部仏印の進駐はインドネシアの油田地帯を狙っていると見透かされても仕方のないことであった。

アメリカのルーズベルトとしてはイギリスを助けるべく枢軸国となった日本を挑発し、アメリカの参戦への大義名分作りに急務であり、日本は巧妙に戦争への挑発に乗せられたと言われても仕方がない。

余談ではあるが、アメリカ空軍の創設者であるウィリアム・ランドラム・ミッチェルは昭和の初期のころハワイの真珠湾を空から攻撃される可能性について論文で言及していた。日本での真珠湾攻撃の立案者である黒島亀人あたりは、ひょっとしてアメリカ留学中に、このミッチェルの論文に触れたのかもしれない。当時破天荒な作戦と思われ山本五十六の片腕として重用された黒島亀人はまた、戦雲厳しくなり特攻機作戦の提案者でもあった。個人的にもかなりの変人に近い人物であった様だ。

負ける事承知の戦いは歴史上数少ないが、陽動作戦として楠木正成の「湊川の合戦」が有名である。この戦に向かうに当たって正成が我が子正行との別れを惜しんだ場面は戦前の小学生唱歌（青葉茂れる桜井の・・・）にもなっていた。

しかしながら、国家を一か八かの危険に晒しても仕方がないと誰が考えたのだろう。自滅覚悟の戦いは籠城による守りに徹して、最後の兵まで戦う考えは古来よりあった。それどころか籠城戦は生き延びる為の有力な戦法として、考えられたことが多い。最初から世界を震撼させるような戦法で、自滅覚悟の戦いなどあろう筈がない。織田信長の「桶狭間」、源義経の「一の谷の合戦」、何れも戦術としての大成功物語ではあるが、戦略論ではない。敢えて言えば「桶狭間」は戦略的な一面から出てきた戦術だったかも知れない。

日本の戦いは最初から物資不足と兵站は伸び切り、戦略的思考は極めて乏しいと言わざるを得ない上、指揮者の大義名分や周りの情緒を重んじる傾向が強かったのではなかろうか。将軍の名に、疵がつくとかつかないとか、名を汚すとか汚さない等、大義名分を重んじる考え方に支配されてきた様に思われる。

あの真珠湾作戦に於いてですら、第1次、第2次攻撃で艦船や航空機を殲滅した後で、第3次攻撃による石油タンクや軍需施設の攻撃が叫ばれたが、航空母艦を打ち漏らしたこともあり、無理をせずに被害極小のまま作戦を中止し、全軍反転して日本に帰還した。

第3次攻撃続行で兵員・飛行機の損害を拡大するよりも南雲司令長官の戦功に疵がつかないように、敵を討ち果たしたという大義名分の下での作戦中止であった。

アメリカの反攻が早かったのは、第3次攻撃を見送った為、ハワイのインフラ含め軍需施設が無傷であったこと、アメリカの空母が無傷であったこと、これが半年後のミッドウェイ海戦の大敗北を招来することになる。

本来は、真珠湾攻撃に続きアメリカ本土まで攻撃を続けることこそ、アメリカに心理的な恐怖を与えるのに戦略としての意義があったのではないかと想像される。ハワイ止まりの攻撃では戦略的に本当に役立ったのか？

単なる時間稼ぎで早期に講和に持ち込むつもりであったのが、ハワイ・東南アジアの戦線が予想以上に戦果を挙げたことから、戦勝ムードに飲み込まれてしまったのか？もしかして講和が成立しても長続きはしなかったであろう。

第一次世界大戦への実戦経験も殆どなかった為、戦争自体を甘く見ていた感じが無くはない。戦争終結に対する明確な展望なく、ムードに押されて開戦してしまったのではなかろうか？

近代戦としては日露戦争以後本格的なものはなく、ノモンハンに於いて初めて近代戦を戦ったが、大型戦車と航空機に手も足も出ない状況で、蝸壺に潜り爆薬を背負った兵士が敵戦車に肉弾で突っ込む以外になかった。かろうじて精神力で戦った訳で、大敗北に終わったが、ソ連崩壊後ソ連側も損害が大きかったらしい。